受賞作品が決まりました
第16回「海の香りのする詩」

海をテーマにした「海の香りのする詩」の受賞作品が決定しました。

市内から813点、市外（県内）からは368点の応募があり、回を重ねるごとに作品のレベルが上がる中、次のみなさんが入賞しました。

教育委員会生涯学習課　☎㉕1268

【市内小学生の部】

大賞「わたしの海」北川波那（弘道小6）、作品は3ページに掲載しました。

伊良子清白賞「広い海に背を向けて」木下順平（菅島小6）

入賞「海にむかう海女」中村圭吾（弘道小6）、「深い海より深い絆」ハイラ美乃（安楽島小6）、「ごめん」小寺晃誠（安楽島小5）

奨励賞「あらめ」小久保雛子（神島小5）、「魚と光」小久保竜樹（神島小6）

【市内中学生の部】

大賞「海底にあるモノ」
藤田季里（鳥羽東中2）

海の一番深いところはどんなところだろう
手のひらで海をすくってみると
海は青を失い
ただの透明な水になって
私の手からこぼれ落ちた
波は一瞬で波紋を消した
小さな波紋を大きな波で
海は何もなかったかのように
青をとり戻す
片足を海の中につっこんでみると
水の中で私の足がうっすらと透け
ちょっぴり青くなる私の足
だけど足をひきぬくと
透明な水がつま先をしたたる
だけだった
波は一瞬で波紋を消した
小さな波紋を大きな波で
海は何もなかったかのように
青をとり戻す
小さな私に海は大きすぎたのだ
私がどんなに体を海にうずめても
海は知らんぷりして笑うんだ
空のように大きくないと
海を包む事はできない
海にはたくさんの生き物がいる
浅くても
深くても
私はその中のただ一匹にすぎないのだ
海と人の心と似ているから
そう簡単に海は私を深くにいれてくれない
ならば
初めは浅くていいじゃないか
小っぽけな私に入る所があるのなら
青くなくたっていいんだ
私はもう一度海に入った
今度は頭から潜る
迷わず手を進める
どんどん深みへ落ちていく
何がいようがかまわない
誰も知らない海の底へ

伊良子清白賞「水中大実験」齋藤勇太（鳥羽東中1）

入賞「毛のりのカーテン」岡野有紗（鳥羽東中1）、「海女さん」小林聖弥（加茂中3）、「夢の魚群探知機」清水勇志（鳥羽東中3）

奨励賞「働き者の海」池内千尋（鳥羽東中2）、「無限の存在」山下早羅（答志中1）

みなさんの作品は、受賞作品集として編集し配布する予定です。

人権文化の花を咲かせよう
vol.123

「差別の現実から深く学ぶ」

10月20・21日の両日、尾鷲市をはじめ東紀州地域の公共施設において、第46回三重県人権・同和教育研究大会が開催されました。わたしが参加した「人権確立をめざす教育・保育の創造」の1C分科会では、三校の小学校の実践レポートが報告されました。

その中の一つに、学級の子どもたち一人一人の揺れ動く気持ちに寄り添い、部落差別の問題にも出合い、その解決のために純粋な気持ちで取り組む6年生の担任の姿がありました。そして、気になる児童A男のことで家庭訪問を続け、やっとの思いでA男の母親から自身の被差別体験を聞かせてもらったといいます。

A男の母親は、小学校高学年の時に部落問題学習の中で被差別部落のことを知ったといいます。しかし、当時の家庭の中では、そのことを話題にすることができなかったという経験から、今の自分の子どもたちには十分に話せる環境を与えたいという思いと同時に、背を向けたいという気持ちも根底にあった。自らが体験した部落差別を無くしたいという思いを強く持っている母親でしたが、それでもやはり不安になる。そんな揺れ動く母親の姿から、若い担任教師は、親身になって相手の思いを汲むことの大事さについて考える機会になったといいます。

この討議の中では、同僚教師からも「今も、本当に部落差別があるという現実、そして部落差別の問題は、地区内にあるのではなく、地区外にある問題である」という発言もありました。『差別の現実から深く学ぶ』という同和教育の原点と共に、部落問題の解決は国民一人一人に課せられた大きな課題でもあります。単なる心掛けだけではなく、間違った日本社会のあり方を変えていく具体的な行動につなげていきたいものです。